



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4514 号 2018.7.28 発行

障害者向け花火、どう工夫 大仙市、秋の章でプロジェクト

秋田魁新報 2018年7月27日

秋田県大仙市で10月13日に開かれる「大曲の花火 秋の章」で、視覚や聴覚に障害のある人が楽しめる花火を打ち上げるためのワークショップが24日、同市の大曲商工会議所で開かれた。障害者と花火業者が、花火を楽しむための工夫や会場のバリアフリー化などについて意見を交わした。

この花火は、日本花火推進協会（本部・東京）が企画し打ち上げる。協力は2020年東京五輪・パラリンピックに合わせ、障害の有無を問わず楽しめる花火大会を実現させたい考えで、秋の章に試行プロジェクトとして障害者向けのコーナーを設ける。

NHKが受信料の免除対象を拡大 申請までの福祉事業所は9月30日までに

福祉新聞 2018年07月27日 編集部



NHKは、2018年4月に「日本放送協会放送受信料免除基準」を変更し、社会福祉事業を行う施設と事業所への免除対象を拡大した。

特別養護老人ホームや保育所など、従来から免除されていた社会福祉事業に加えて、2001年1月以降に社会福祉法に規定された小規模多機能型居宅介護事業や小規模保育事

業なども免除の対象とすることで、社会福祉法上での取り扱いの差がなくなり、すべての事業が免除されることになった。

新たに免除対象となった施設・事業所の契約に関しては、免除申請書をNHKに提出し9月30日までに受理されると、4月（4月時点で免除基準に該当していない場合は、該当した月）にさかのぼって免除が適用される。

問い合わせは、NHKふれあいセンター（電話0570・077・077）へ。

◆新たに対象となる施設・事業所

【児童福祉関連】

- ・障害児通所支援事業のうち「保育所等訪問支援」
- ・障害児相談支援事業
- ・子育て短期支援事業
- ・乳児家庭全戸訪問事業
- ・養育支援訪問事業
- ・地域子育て支援拠点事業
- ・一時預かり事業
- ・小規模住居型児童養育事業
- ・小規模保育事業
- ・病児保育事業
- ・子育て援助活動支援事業

【障害者福祉関連】

- ・障害福祉サービスのうち「同行援護」
- ・障害福祉サービスのうち「療養介護」
- ・一般相談支援事業
- ・特定相談支援事業
- ・移動支援事業
- ・身体障害者生活訓練等事業
- ・手話通訳事業
- ・介助犬訓練事業
- ・聴導犬訓練事業
- ・盲導犬訓練施設

【老人福祉関連】

- ・小規模多機能型居宅介護事業
- ・複合型サービス福祉事業

【その他】

- ・福祉サービス利用援助事業
- ・認定生活困窮者就労訓練事業

知的障害児、本に親しむ…特別支援学校で図書室利用広める動き

読売新聞 2018年7月27日

知的障害の子どもが通う特別支援学校で、図書室を積極的に利用する取り組みが進んでいる。毎日の利用で文字が読めるようになるなど、能力を広げる子もいる。知的障害児は読書が難しいとの考えから、休眠状態の図書室が少なくないが、専門家は障害児も図書に触れる環境が必要だと指摘する。（板東玲子）



知的障害児らが通う東京都立鹿本学園（東京都江戸川区）の小学部3年、津久井零士君（8）は、学校で絵本2冊を借りるのが日課だ。乗り物の絵本が好きで、最近授業で学んだ数字が出てくる絵本も、担任と一緒に借りる。

津久井君は474グラムの未熟児で生まれ、脳性マヒによる知的障害と身体障害がある。母の美由紀さん（47）は「成長がゆっくりで、小1の時は読み聞かせにも無反応だった。毎日続けるうちに果物や野菜などの名前が分かるようになり、今は数字も少し数えられる」と喜ぶ。

2014年に支援学校2校の統合で誕生した同学園は、本に触れる機会を増やそうと、図書の充実や利用習慣の定着に力を入れている。図書室に5000冊が並ぶほか、廊下に低いラックを置いて新刊を並べ、バーコード処理で簡単に貸し出せる仕組みも導入。貸出総数は昨年度、1万1500冊を超えた。

借りた冊数を競う催しには、全児童・生徒約430人が参加する。小2の真船未羽さん（7）は昨秋、2か月で77冊を借り、1位に。海の生物などに興味を持ち、50音も覚えた。校長の庄司伸哉さんは「障害が重い子にも変化が見える。読書を通じ、どう成長す

るのか楽しみ」と話す。

図書室の利用に熱心な支援学校は従来、あまりなかった。学校図書館法は支援学校にも図書室の設置を義務付けているが、教室に転用するなどして実質的にはない学校もある。全国学校図書館協議会（東京）が13年に実施した調査では、知的障害児の通う支援学校での設置率は80%だったが、そのうち会議室などと兼用のケースが34%に上り、1人あたりの年間平均貸出数も2冊にとどまった。

専修大教授の野口 武悟 さん（図書館情報学）は「知的障害児に本は難しいとの思い込みがあり、教員らが図書の活用に消極的だった」と指摘する。教科書を使わず、実生活に即した体験型の授業が中心という事情もあるが、最近では活用を図る動きが出てきた。

都立の支援学校ではほかにも例があり、都教委は好事例を分析してノウハウをまとめ、全57校に広めていく考えだ。障害児の図書利用に詳しい都立光明学園（東京都世田谷区）の校長、田村康二郎さんは「図書を更新していないケースも多い。子どもが手に取りやすい環境作りをするべきだ」と訴える。

鳥取大学付属特別支援学校（鳥取県鳥取市）は、調べ学習などで積極的に利用している。13年の校舍改修に伴い、図書室を子どもが立ち寄りやすい1階に移設。学校司書が子どもの興味を把握して公共図書館から資料を借りるなどする。

野口さんは「多様な情報や文化に触れる経験は、障害の有無にかかわらず、生きていく上で大事な力となる。障害が重くても本が好きと思えるような経験ができる環境を整備すべきだ」と話す。

セミナー 特別支援学校生、就労へ技術と意欲PR 県内企業70社参加 鳥取 /鳥取

毎日新聞 2018年7月27日

飲食店を想定し、企業の担当者らに接客技術を披露する生徒（左）＝鳥取市伏野の県立福祉人材研修センターで、小野まなみ撮影



特別支援学校に通う生徒の一般就労を促すためのセミナーが鳥取市内であった。県内に本支社がある企業など70社が出席。生徒らは接客やパソコン作業などの技術を披露したり、意欲をアピールしたりした。

今回、県東部の五つの特別支援学校の高等部生徒約150人が参加。企業側は、これまで障害者雇用をしていない事業所も13社出席した。

はじめに、在校生や卒業生が意見発表。県立鳥取養護学校高等部3年の川戸竜太さん（17）は、職場体験を通して感じたやりがいを話し「社会の一員として企業で働き、誰かの役に立ちたい」と語った。県立白兔養護学校高等部3年の中村広太さん（17）は「長所を更に伸ばして、短所は改善し、より良い自分になりたい」と話した。

また、鳥取大付属特別支援学校を卒業し、一般企業で働く安富翔太さん（22）は、苦手な作業があるものの、周囲に相談しながら業務に取り組んでいることを紹介。在校生に向け、高校時代に学んで良かったことなどもアドバイスした。【小野まなみ】

島ぞうりとキルト 親子展 高島

読売新聞 2018年07月27日

展示作品を紹介する境好美さん（左）と貴昭さん親子（高島市で）

ヤンバルクイナなど沖縄に生息する希少動物を彫り込んだビーチサンダル「島ぞうり」をつくる高島市の境好美さん（37）と、その母でキルト制作を続ける好美さん（63）の親子展が26日、同市安曇川町のギャラ



リー藤乃井で始まった。

動物が好きで獣医畜産学部を卒業した貴昭さんは、ぞうりの足裏に触れる白いゴム板を医療用メスで切り抜いて、野鳥や昆虫の絵を描く。ぞうりは全て傷ついた動物の救護活動をする沖縄のNPO法人に送り、活動資金の一部に充ててもらっている。

自身も任意団体「放鳥's」を組織。傷ついた野鳥などに治療やリハビリを施し、自然に返す運動を続けている。展示作品は30点。「野生動物との共生の大切さも知ってほしい」と語る。

一方、障害者福祉の仕事に長く携わった好美さんはもの作りが好きで、施設の利用者に裂き織りや刺し子なども指導してきた。趣味で始めたキルトの制作歴は15年。今回は、数か月かけて仕上げたステンドグラス風のタペストリーなど、花々をモチーフにした40点を並べた。

「すべて手縫い。模様を貼るだけでなく、切り抜いて表現した点も見してほしい」と話している。

31日まで。入場無料。問い合わせは同ギャラリー（0740・32・0150）。

タイガー魔法瓶、高齢者向け炊飯器を発売 ご飯のみ込みやすく

日本経済新聞 2018年7月26日



タイガー魔法瓶（大阪府門真市）は26日、高齢者向けの炊飯器を8月21日に発売すると発表した。ご飯が食べやすく、誤えんしにくいのが特徴。炊飯時にお米から出るでんぷんを取り除いてご飯の粘り気を抑え、唾液が出にくい人のみ込みやすいようにした。まずは介護福祉施設などに販売し、将来は家庭向けモデルの展開も視野に入れる。

開発したプレートが余分なでんぷんをすくい取る

発売するのは「さらっとご飯クッカー」。お米を炊く時に、でんぷんが泡状になって炊飯釜の上部に浮く現象を利用。おいしさを保ちながら不要なでんぷんをすくい取る構造を開発した。

お米をやわらかくし、でんぷんも引き出すため、炊飯に使う水量を増やした一方、火力などを強化。水っぽくなく、かむ力が衰え人がのみ込みやすい炊飯を実現した。想定価格は税別4万円。高齢者が入居する福祉施設に直接売り込むなどし、1年間で1千台の販売を計画する。

26日は小麦など7種類のアレルギーマテリアルを用いない工場で作られる米粉の発売も発表した。同社の一部ホームベーカリーでパンを作れる。8月21日から量販店で販売し、税別価格は1200円。同社は「健康」をキーワードに、今回発表した製品の販売などの事業に注力しており、関連製品で2023年度に売上高200億円をめざしている。

生活保護世帯にエアコン代 厚労省、熱中症対策

東京新聞 2018年7月27日

厚生労働省は二十六日までに、生活保護世帯での熱中症予防のため、要件を満たせばエアコン購入費用（上限五万円）の支給を認めることを決めた。同費用の支給は初めて。既に今月一日から運用を始めているという。猛暑が続いていることから、二十六日に生活困窮者の支援団体などが厚労省を訪れ「当事者らに知られておらず、命と健康が危険だ」として周知を徹底し、支給対象を拡大するよう求めた。

四月以降に生活保護の受給を始めた世帯のうち自宅にエアコンがなく、高齢者や障害者、子ども、体調の優れない人がいる場合が対象。購入費用と設置費用の一部を支給する。生活保護世帯が熱中症になるケースも多いため、厚労省は六月二十七日に自治体に通知した。

厚労省を訪問した支援団体や生活保護受給者は、通知内容の周知が不十分だと批判。以前から生活保護を受けている世帯も対象に加えるよう求めたが、厚労省は拒否した。同省は取材に「必要な生活用品は生活保護費の中で賄うのが原則」と述べた。

「生活保護問題対策全国会議」事務局長の小久保哲郎弁護士は記者会見し「通知内容は現場の自治体担当者にも知られていない」と指摘。体調が悪くて働けないという東京都の五十代男性は「金銭的にやりくりする余裕はない」と述べ、支給対象を四月以前からの受給世帯に広げるよう訴えた。

放課後デイ、85%が減収に… 国が自治体に再判定促す 佐藤啓介

朝日新聞 2018年7月27日

障害のある子どもが通う「放課後等デイサービス」を巡り、今年度の報酬改定で減収になる事業所が続出したため、厚生労働省は26日、市区町村に対し、子どもの障害の重さを再判定するよう促す連絡をした。

放課後等デイサービスは障害児が放課後や長期休暇に通い、発達支援を受けられる施設。今年度から厚労省は、利用する子どもの障害程度を市区町村が判定し、重度の子が半数以上かどうかで事業所の報酬を線引きすることにした。

しかし、事業者側から「子どもの状態を見ず軽度と判定された」などと批判が続出。厚労省が判定状況を調べたところ「障害が重い子が半数未満」とされ、減収になる事業所が85%に上ることが分かった。

「となりの少年少女A」 草薙厚子著

日刊ゲンダイ 2018年7月27日

1997年に神戸市で起きた「酒鬼薔薇聖斗事件」。その犯人である少年Aが医療少年院を退院し、保護観察期間を終えた後、手記「絶歌」を出版した。その中には、事件の直接的な動機や、医療少年院で行われた「矯正教育」に関する記述がほとんど見当たらない。

少年Aには医療少年院で、精神科医によって「アスペルガー障害」と診断されたが、その障害に沿った矯正プログラムは行われなかった。アスペルガー障害は「脳機能の障害」であり、根本的な治療は難しいが矯正は可能である。

「発達障害」による少年犯罪を防ぐために「早期発見」「早期治療」の重要性を説く警告の書。

(河出書房新社 1500円+税)



ニュースのことば 相模原障害者施設殺傷事件 毎日小学生新聞 2018年7月27日

ねん がつ にちみめい かながわけんしがみほらし しょうがいしゃしせつ つく い えん
2016年7月26日未明、神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で
はっせい にゆうしょしゃ つぎつぎ はもの さ にん しぼう しょくいん ふく にん
発生しました。入所者が次々と刃物で刺され、19人が死亡し、職員を含む27人が
じゅうけいしょう お か こ しせつ はたら うまつさとしひこく にん
重軽傷を負いました。過去に施設で働いていた植松聖被告(28)が、19人の
さつじんざい たいほ きそ
殺人罪などで逮捕・起訴されました。

じけん ひがいしゃ かぞく しょうがいしゃ たい しゃかい へんけん おそ なまえ ふ
事件の被害者や家族のほとんどが、障害者に対する社会の偏見を恐れ、名前を伏せた
まます。「障害者は生きていても意味がない」などと差別的で身勝手な発言をしている
うえまつひこくひとり もんだい しゃかい ひろ さべつ へんけん もんだい かいしょう
植松被告一人の問題ではなく、社会に広がる差別や偏見の問題をどのように解消して
いくかが問われています。

相模原の障害者施設殺傷 事件2年 226人献花、犠牲者悼む /神奈川

毎日新聞 2018年7月27日

殺傷事件から2年。相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」には、犠牲者19人を悼む人々が集まった。殺人などの罪で起訴された植松聖（さとし）被告（28）の差別的な言動に怒りを感じる人、事件の風化に危機感を覚える人。それぞれが問題意識を抱きながら、19人に花を手向けた。

「今でもうそみたいと思う」。ほとんどの犠牲者と顔見知りだったという元職員の60代女性は、献花台の前で思い出を語った。「あの人は無口だった」。「よく散歩に出掛けたな」。女性は「今も、皆さんがその辺りにいるような気がする」と言う。

献花台には、職員や利用者が折り紙で折った千羽鶴やユリが供えられ、犠牲者が好きだったバナナや団子などを模したスタンドグラスが飾られていた。県によると、昨年よりも多い226人が献花に訪れたという。

園を運営する「かながわ共同会」の草光純二理事長は「なぜ守れなかったのか、大変申し訳ないという思いで手を合わせた」という。園の再建にも言及し「大変な惨状があった場所として忘れ去りたい一方、半世紀以上にわたって利用者や地元の人たちと営んできた歴史がある」と語った。

植松被告は「障害者は不幸をつくる」などと主張を続ける。娘が障害を抱えるソーシャルワーカーの平岡祐二さん（58）は「彼の考えに同調するような社会は怖い」と語った。園の近くに住む太田紀子さん（75）は、植松被告が園の職員だった過去に触れ「悔しい。地元と園はよい関係だったのに」と声を震わせた。

黒岩祐治知事は午前9時過ぎに献花。「ここに来ると胸が締め付けられる。19人の犠牲者について植松被告は『心を失った人間』と話しているというが、そんなでたらめは許さない。園舎の除却工事が始まっているが、事件の風化が恐ろしい」と話した。

地域住民らによる「共に生きる社会を考える会」のメンバーも献花台を訪れた。同会は関係者らに犠牲者の記憶を聞き取ってきた。太田顕共同代表は、ある犠牲者の思い出に触れ、「あなたが小学生の頃に担当されていた特別支援学級の先生が会いに来ましたね」と語りかけた。

横浜市神奈川区のかながわ県民センターでも26日午後、入所者の家族や支援者の有志でつくる「津久井やまゆり園事件を考え続ける会」が追悼の集いを開いた。約100人が訪れ、犠牲者19人の性別と年齢がそれぞれ書かれた額に花を手向けた。同会の杉浦幹さんは「ここに名前がない理由を私たちは考えていかななくてはいけない」と話した。【国本愛、堀和彦、高橋和夫】

どうして一癒えぬ傷抱え前へ...相模原殺傷事件 鎮魂祈り献花

読売新聞 2018年07月27日

相模原市緑区の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が殺害された事件から2年となった26日、園の献花台には多くの人々が訪れ、鎮魂の祈りをささげた。「みんな輝いていた」。それぞれの言葉で犠牲者を悼み、差別のない共生社会の実現を願った。

■19人を忘れない

献花台の前で手を合わせる元職員の太田顕さん（右端）ら（26日、相模原市緑区で）＝横山就平撮影
献花台は、犠牲者の好物であろうと果物の飾りなども供えられた



「散髪のボランティアがぼうず刈りにカットしてくれたこと、覚えていますね」。19人の生前の様子を聞き取る活動が続ける元職員の太田顕さん（75）は献花台に向かって語りかけ、誓った。「みんな輝いて、幸せをかみしめていた。事件を風化させないように、息の長い活動が続けたい」



園は建て替えが決まり、入所者らは横浜市港南区の仮移転先で暮らしている。

入倉かおる園長（61）は献花後、「あの日が悔やまれて仕方ないが、精いっぱい再生に向かって進んでいく」と述べた。

献花台には、近くの介護施設の利用者が、19人が好きだったであろうと作ったバナナや団子などの飾りもつるされた。

■障害者も意思はある

殺人罪などで起訴された元職員の植松聖被告（28）は事件後、「意思疎通のとれない障害者は人間ではない」などと繰り返す。

兵庫県明石市の市立小学校で特別支援学級を担当する三好淳一教諭（43）は献花に毎年訪れ、「意思がない子はいない。どんなにうまく話せない人でも伝えたいことはある。受け入れる社会を作らないといけない」と訴えた。

■風化させない

上半身などの障害で車椅子で生活する東京都中野区の和田拓也さん（25）は、月命日の26日にはほぼ毎回、花を手向けてきた。「僕には何もできないが、せめて、との思い。命日は年に1回だが、風化してほしくない」

相模原市の訪問介護施設で働く横浜市泉区の理学療法士安西祐太さん（30）は事件の発生時間帯である午前2時38分に訪れ、手を合わせた。事件後、障害者への理解を深める講演会を企画してきた。「近くで起きた事件を人ごととは思えなかった。風化させないように、できることをやりたい」と力強く語った。

献花台には午前8時から午後5時までに、昨年より約70人多い226人が訪れた。29日まで設置される。



「追悼の集い」各地で

「追悼の集い」で19人の犠牲者に献花する参加者（横浜市神奈川区で）

津久井やまゆり園に入所していた知的障害者の家族や福祉関係者らのグループはこの日、横浜市内で「追悼の集い」を開いた。

会場に置かれた献花台には、事件で亡くなった19人の年齢と性別が書かれたフレームが並べられ、参加した約100人が犠牲者ひとりひとりに手を合わせた。

主催者の一人で、NPO法人職員の杉浦幹さん（58）は「事件がどんどん忘れられていく気がする」と危機感を訴えた。川崎市の障害者支援施設で施設長を務めていた中山満さん（67）も『障害者は金がかかる』とする植松被告の主張に賛同する人も社会には少なくない。皆でもっとよい世の中を作っていく必要がある」と力を込めた。

やまゆり園の元職員太田顕さん（75）も、園の近くで宮崎昭子さん（81）ら地域住民と「偲ぶ会」を開き、入所者の家族ら約70人が集まった。参加者からは事件の風化を懸念する声も上がり、宮崎さんは「障害がある人も普通に生活できるような社会になるべ

きだ」と訴えた。

【社説】相模原事件2年 優生思想にどう向き合う 徳島新聞 2018年7月27日

神奈川県相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が殺害され、職員を含む26人が負傷した事件から2年がたった。

この間、社会は事件としっかり向き合っただろうか。

犠牲者数が戦後最悪と言われる殺人事件である。現場となった施設は、建て替えに向けた解体工事が今年5月に始まった。

だが、事件の全容を解明するための公判は、まだ始まっていない。

殺人や殺人未遂など六つの罪で起訴されている元施設職員の植松聖被告(28)に対し、2度目の精神鑑定が行われているためである。8月に終了し、初公判は来年になる見通しだ。

「障害者なんて要らない」。事件当時に被告が見せた身勝手に差別的な言動は、社会や当事者に衝撃を与えた。

最近、拘置先で複数回接見した共同通信などの記者には「私が殺したのは人ではない」と、事件を正当化する主張を繰り返している。一貫して、事件を起こしたことを反省するそぶりはない。

再発防止を図るためにも、被告の動機がどう形成されたのかを追究する必要がある。公判では責任能力の有無が大きな争点になりそうだが、曖昧な部分を残さず、真相に迫ってもらいたい。

被害者家族は今も深い悲しみの淵にいる。

事件後、被害者家族の多くは差別や偏見を恐れ、氏名公表を拒み、口を閉ざした。

被告の言動に賛同する声や障害者の生を否定する言葉は、相変わらずインターネットを中心に散見される。被害者家族を苦しめ続ける一因であり、憂慮すべき状況だ。

障害者に限らず、社会的弱者を攻撃するような風潮が広がっていないか。

自民党の杉田水脈衆院議員が月刊誌「新潮45」への寄稿で、子どもをつくらない性的少数者(LGBT)カップルを「生産性がない」と突き上げ、批判を浴びた。事件の被害者家族を苦しめる言葉と通底する部分があるのでは、と危惧する。

旧優生保護法の下で障害者に強制不妊手術が繰り返された問題にも、つながる話だ。

同法は知的障害や精神疾患を理由に、本人の同意がなくても不妊手術を認めた。強制不妊のような過去の過ちを繰り返してはならない。

心ない差別や偏見を解消しようという活動が、各地で相次いでいる。障害者を支援する団体などが呼び掛け、共生社会の在り方を考えている。有意義な取り組みと言え、もっと広がってほしい。

心配なのは、事件が語られなくなることである。相模原市で先日行われた追悼式では前年より参加人数が減り、県知事が風化に懸念を示した。

ある障害者団体の代表が語った「世の中の人々は皆、早く忘れたいんです。心の奥のどこかに優生思想があるから」との厳しい指摘を、重く受け止めるべきだろう。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

